

夕雲物語

改稿・その二

落葉を踏んでふたりは歩きました。やはらかに肩を組合つて愉しいのでありました。さうして天の刑罰でこんな病に罹なつたのだとは少しも思はないのであります。二つの魂が歩む度に、落葉が小さな旋風をあげて足下を駈けまわつてゐました。空は痛いほど青く澄んで、すっかり坊主になつた林の向うから犬が啼きました。それが空の中で啼いたやうに思はれるのであります。

わう、わう、わう、ばう……

男は口をすぼめて啼真似ながら、林の向うへ挑むのであります。それは空の青に輝がはいるやうに思はれました。すると、林の向うからは前よりも激しく食つて掛るのであります。それはどつやう空から落ちてくるやうでした。

わう、わう、わう、ばう……

男は面白くなつて、負けずに林の向うへ啼き返すのであります。それはやつぱり空の青に輝がはいるやうでした。あなたお止しなさいよ 女は微笑みながら、林の向うへ首をかしげ、男の肩をそつと抓りました。男の啼声が早くなると、林の向うでも早くなりました。林の向ふから思ひ出したやうに飛んでくると、男の方でも急いでそれに相槌を打ちました。さうして女の間**の**びた足が、道端の堆肥を丁寧にさわつた時、始めて男の啼声が途中でひつ切れました。その煽りで、落葉がながいことふたりの周囲をくるくるくる廻つてゐました。女は美しい盲でありました。詰らなくなつてやめたのか、林の向うは静かになつて、いつの間にか、輝のはいつた空から、美しい夕雲が覗いてゐるのであります。

(昭和十三年「山桜」十月号)